1858年飛越地震における死亡者数と土砂災害
―飛騨国を事例として―

矢　田　俊　文

は　じ　め　に

本稿の目的は、1858年飛越地震における一軒当り平均死亡者数から災害の原因を明らかにすることにある。

すでに、筆者は1751年高田地震について、村ごとに家数と家屋倒壊数、死者数等被害数が記された史料により、震源域の再検討を行ったことがある。(1) そのさい、震源域からはずれるものの一軒当り平均死者数が際立って多い村があることに気づいた。被害数を記した史料をみると、これらの村は山崩れ・流失により家屋被害を受けていることが記されていて、平均死者数の多さは土砂災害によるものであることがわかった。

地震被害地域の一軒当り平均死亡者数を出して震源域を推定するときに、山崩れが頻繁に起きる地域がそこに含まれる場合、土砂災害による一軒当り死亡者数が際立って多いため、震源域を特定することはできない。しかし、一軒当り平均死亡者数を求めることによって、土砂災害を起こした村を示すことができるのではないか。

1858年飛越地震における飛騨国地域を事例として、一軒当り平均死亡者数から土砂災害を起こした村を明らかにしていく。

1　1858年飛越地震の被害

1858年飛越地震における飛騨国地域では、一軒当り死亡者数を割り出せる史

(1)　矢田俊文・卜部厚志「1751年越後高田地震による被害分布と震源域の再検討」『資料学研究』8号、2011年

料がある。その史料とは、「飛騨国村々大地震先御届書」[2]である。この史料の冒頭部分と被害の種類がよくわかる「天生村」の個所を紹介すると、次のようなものである。

（史料１）

飛騨国村々大地震先御届書

飛騨国吉城郡

一、高六拾八石七斗七升三合　　大無雁村

家数弐拾四軒

人別百六拾四人

内

潰家四軒

右之外、往還欠所出来候得共、間数不相知旨申立候

一、高三拾七石七升六合　　落合村

家数拾弐軒

人別八拾六人

内

潰家弐軒

外

牛馬死弐疋

右之外、田畑并往還欠所植木場崩損候分も有之候得共、反別・間数等不相知旨申立候

（中略）

一、高弐拾三石七斗七升四合　　天生村

家数拾弐軒

---

(2)　高山陣屋文書、岐阜県歴史資料館所蔵。本史料はすでに『岐阜県史　史料編　近世八』（岐阜県、1972年）に翻刻されている。『岐阜県史　史料編　近世八』の翻刻は表記方法が原本と異なる。岐阜県史刊行当時は、岐阜県立図書館所蔵。文書１「飛騨国村々大地震先御届書」は「安政五午年　飛州村々地震一件　高山控」と題された冊子に所収されている。同史料については、すでに片桐昭彦・小野映介の説明がある（同「1858年飛越地震における飛騨国小鳥川筋被災地地域の復旧」『災害・復興と資料』４号、2014年）。

人別九拾壱人
内
潰家八軒
半潰家四軒
即死三人
怪我四人
外
馬即死三疋
右之外、田畑損地出来候得共、未取調方不行届旨申立候

史料１には、村全体の家数、人数、潰家数、半潰家数、即死人数、怪我人数、牛馬死数が記されている。このうち、牛馬死数を除いて表にしたものが第１表である。潰家は半潰家の前に記載されているので、全壊家屋のことと判断し、皆潰と表記した。

第１表　1858年飛越地震飛騨国被害一覧

番号	村名	a、家数（軒）	b、皆潰（軒）	c、半潰（軒）	d、即死（人）	e、怪我（人）	f、家屋全壊率（%）	g、家屋全半壊率（%）	h、一軒あたりの即死者数（人）	現行政地名	人数（人）
1	大無雁村	24	4	0	0	0	17	17	0	飛騨市	164
2	落合村	12	2	0	0	0	17	17	0	飛騨市	86
3	岸奥村	4	0	1	0	0	0	25	0	飛騨市	28
4	野首村	10	7	3	0	0	70	100	0	飛騨市	71
5	林　村	27	15	12	0	2	56	100	0	飛騨市	139
6	牧戸村	9	3	6	0	0	33	100	0	飛騨市	69
7	丸山村	7	4	2	26	3	57	86	3.71	飛騨市	51
8	種蔵村	23	6	18	0	2	26	100	0	飛騨市	151
9	菅沼村	11	3	9	3	0	27	100	0.27	飛騨市	81
10	巣之内村	8	2	6	3	1	25	100	0.38	飛騨市	43
11	塩屋村	15	1	7	0	0	7	53	0	飛騨市	98

12	小嶋郷中沢上村	4	0	1	0	0	0	25	0	飛騨市	35
13	山之山村	2	0	1	0	0	0	50	0	飛騨市	21
14	禰宜ヶ沢上村	14	5	9	4	0	36	100	0.29	飛騨市	107
15	小無雁村	14	0	2	0	0	0	14	0	飛騨市	119
16	稲越村	64	3	0	11	0	5	5	0.17	飛騨市	418
17	天生村	12	8	4	3	4	67	100	0.25	飛騨市	91
18	小鷹利郷中沢上村	6	6	0	7	3	100	100	1.17	飛騨市	56
19	有家村	16	8	8	10	2	50	100	0.63	飛騨市	109
20	元田村	40	27	13	56	14	68	100	1.40	飛騨市	266
21	新名村	17	9	7	2	1	53	94	0.12	飛騨市	114
22	上ヶ嶋村	8	6	2	2	1	75	100	0.25	飛騨市	58
23	羽根村	11	9	2	5	4	82	100	0.45	飛騨市	112
24	保木村	10	9	1	3	2	90	100	0.30	飛騨市	71
25	有家林村	8	6	2	0	0	75	100	0	飛騨市	45
26	森安村	5	5	0	3	0	100	100	0.60	飛騨市	38
27	西忍村	48	43	5	12	0	90	100	0.25	飛騨市	279
28	三川原村	26	7	15	7	6	27	85	0.27	飛騨市	129
29	高牧村	9	6	3	3	5	67	100	0.33	飛騨市	75
30	左古村	14	14	0	2	0	100	100	0.14	飛騨市	89
小計			218	139	162	50					3745
31	保木脇村	6	0	6	0	0	0	100	0	白川村	52
32	野首村	3	2	1	0	0	67	100	0	白川村	26
33	大牧村	13	0	13	0	0	0	100	0	白川村	110
34	荻町村	92	37	44	0	0	40	88	0	白川村	620
35	嶋　村	7	1	4	0	0	14	71	0	白川村	64
36	牛首村	5	1	4	0	0	20	100	0	白川村	51
37	鳩谷村	18	4	0	0	0	22	22	0	白川村	109
38	飯嶋村	49	10	0	0	0	20	20	0	白川村	367
39	大窪村	2	0	1	0	0	0	50	0	白川村	26
40	馬狩村	8	2	3	0	0	25	63	0	白川村	63
41	長瀬村	13	0	5	0	0	0	38	0	白川村	237
42	木谷村	7	3	0	0	0	43	43	0	白川村	149
43	椿原村	5	0	0	0	0	0	0	0	白川村	50
44	蘆倉村	5	0	0	0	0	0	0	0	白川村	69
45	小白川村	9	0	0	0	0	0	0	0	白川村	75
46	巣納谷村	15	5	6	4	0	33	73	0.27	飛騨市	108

47	加賀沢村	9	0	9	0	0	0	100	0	飛騨市	68
48	谷　村	6	0	1	0	0	0	17	0	飛騨市	40
49	打保村	37	4	28	0	0	11	86	0	飛騨市	220
50	戸谷村	16	5	10	1	0	31	94	0.06	飛騨市	97
51	角川村	98	42	35	23	3	43	79	0.23	飛騨市	587
52	桑ヶ谷村	11	1	6	3	0	9	64	0.27	飛騨市	94
53	小野村	6	0	1	0	0	0	17	0	飛騨市	48
54	杉原村	22	7	15	7	1	32	100	0.32	飛騨市	167
55	小豆沢村	17	0	17	0	0	0	100	0	飛騨市	110
56	跡津川村	22	3	16	2	0	14	86	0.09	飛騨市	148
57	大多和村	6	3	3	0	0	50	100	0	飛騨市	35
58	土　村	4	0	4	0	0	0	100	0	飛騨市	29
59	鹿間村	9	0	9	0	0	0	100	0	飛騨市	67
60	割石村	16	0	16	0	0	0	100	0	飛騨市	91
61	吉ヶ原村	1	1	0	0	1	100	100	0	飛騨市	3
62	二ツ屋村	2	0	2	0	0	0	100	0	飛騨市	12
63	東漆山村	12	0	12	0	0	0	100	0	飛騨市	92
64	牧　村	5	1	4	0	0	20	100	0	飛騨市	33
65	西漆山村	28	13	15	5	1	46	100	0.18	飛騨市	156
66	杉山村	10	0	10	0	0	0	100	0	飛騨市	68
67	横山村	14	0	10	0	0	0	71	0	飛騨市	87
68	茂住村	39	2	34	0	0	5	92	0	飛騨市	271
69	中山村	19	1	1	0	0	5	11	0	飛騨市	100
小計			147	345	45	6					

典拠）飛騨国村々大地震先御届書（岐阜県歴史資料館所蔵）
注）１．ｆは、b/a（%）、ｇは、(b＋c)/a（%）、ｈは、d/a。２．吉城郡保村（59軒）の被害は未調査のため記載無し。３．８種蔵村・９菅沼村の家数・皆潰家屋数は史料の数値のまま記載。４．ｇは100%とした。５．小計は文書に記載されたままである。６．ｈは一軒当り平均死亡者数。

第１表ｆは家屋の全壊率、ｇは家屋の全半壊率である。ｈは即死者数を村の家数で除したもので、一軒当り平均即死者数となる。第１表には村の人数を記しているのであるから、村の人数で即死者数を除せば、即死者率がわかりそうであるが、村の人数が何歳以上から何歳迄の人数を記しているのか明らかでなく、村の人数を確定できないこと、また、文書１のように村の人数を記した上で死者数を記した史料はすくなく、一軒当り平均死亡者数を出すことが重要であると考えた。

第１表の即死者数の合計は207人、全軒数は1144軒である。よって、一軒当り平均死亡者数は0.18人である。第１表をみるとわかるように、死亡者を出していない村も多い。一方で、一軒当り１人以上の死亡者を出している村もある。一軒当り平均死亡者から災害の原因を推定する方法を見出すことができるのではないか。

2　飛越地震と土砂災害

1858年飛越地震において飛騨国地域（第１表の地域、飛騨市・白川市）で死亡者を出した原因はなにか。家が揺れ潰れて家の建築部材の下敷きになって死亡したのか[3]、それとも山崩れにより家が埋まったため死亡したのか。第１表だけではその原因はわからない。

第１表の村のうちで一村当り平均死亡者数が１人を越える村の被害原因を史料１以外の史料から探ってみよう。

（史料２）

安政五年

二月廿五日夜九ツ半時、大地震ニテ当国小鷹利郷大損シ天生村不残ツフレ、夫ヨリ神通川通小豆沢迄ノツフレ家数不知、即死ノ人小鷹利郷丈ニテ二百余人、山崩ハ実ニ大変、就中、大事ハ元田村ノ柳ヶ平崩、アラ町立石滅亡、中沢上、丸山此三ヶ所ハ勝レテアリ、其他所々ノ崩レ筆紙ニ尽シカタシ、法中願徳寺・専勝寺・宝林寺ツフレ聖円寺半ツフレ、祢宜ヶ沢上寺滅亡[4]

史料２は保（ほう）村（飛騨市、旧河合村）にあった浄土真宗寺院憶念寺[5]の史料であ

---

(3)　1828年三条地震の死亡原因が報告された史料によると、家が揺れ潰れて民家の建築部材である柱・さし・桁・梁・鴨居等の下敷きになって死亡していることがわかる（矢田俊文「中世・近世の地震災害と「生きていくこと」」『日本史研究』594号、2012年。矢田俊文「一八二八年三条地震における民衆と民家の被害」新潟大学人文社会・教育科学系附置環東アジア研究センター編「環東アジア地域における社会的結合と災害」新潟大学人文社会・教育科学系附置環東アジア研究センター、2012年）。

(4)　「過去帳」憶念寺文書『飛騨河合村誌　史料編下』（河合村、1984年）

る。史料２には山崩れの被害について記している。２月25日夜９ツ半時の大地震で、元田村・中沢上村・丸山村の山崩れ被害が際立って大きかったと記されている。元田村については、元田村ノ柳ヶ平崩、アラ町[(6)]立石滅亡とあり、元田村のうちの枝村立石[(7)]が山崩れのため被害をうけている。

（史料３）

安政五年

二月廿五日之夜、九ツ半ニ大地震ニて稲越之桂上村彦次郎・次郎助・治兵衛右三軒山ぬけニてをしつぶされ人数拾壱人死す、角川村大つぶれ、元田荒町立石山ぬけニて人数五拾六人死すと也[(8)]

史料３には、二月二十五日夜九ツ半時の大地震で稲越の桂上（けいじょう）村の上村彦次郎・次郎助・治兵衛の家三軒は、山抜け（山崩れ）によって押しつぶされ、11人が死んだ、元田荒町立石は山抜けで56人死んだ、と記されている。

稲越とは、第１表の16稲越村のことで、第１表には稲越では死亡者が11人とあり、この死亡数と史料３の死亡数は同じである。元田とは、第１表の20元田村のことで、第１表には元田では死亡者が56人とあり、元田においても第１表の死亡数と史料３の死亡数は同じである。

稲越で山崩れがあったことは別の史料からも確認できる。

（史料４）

（前略）

右は当村御田地内当二月中震災山崩ニ而押埋、損地ニ相成候分取調候処、書面之通ニ御座候、以上

安政五午年七月　　吉城郡稲越村

百姓代　甚七

---

(5)　『飛州志』

(6)　アラ町は、「平成４年新日本地図制作2000分１岐阜県吉城郡河合村全図」（河合村役場）の元田内に見える集落「荒町」である。

(7)　元田村の枝村には、立石のほかに、稗生原・千鳥がある（『斐太後風土記』）。

(8)　御廻状写帳『飛騨河合村誌　史料編下』

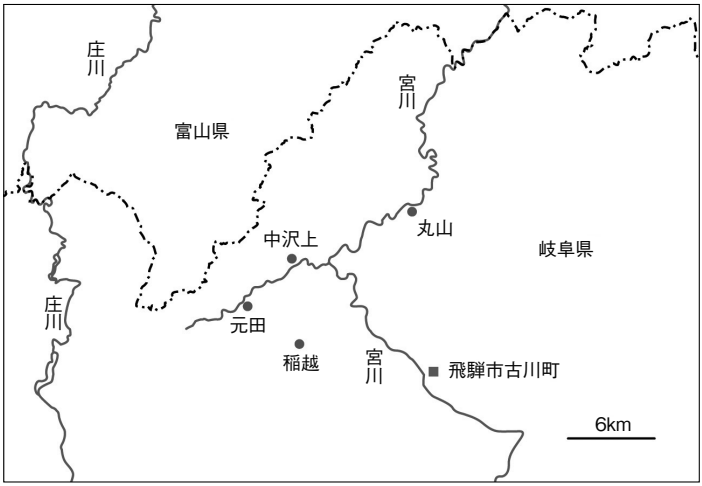
同村与頭　次郎右衛門
同村名主　彦太郎

高山
御役所
（後略）[9]

史料４は、稲越村の名主・組頭・百姓代が高山（岐阜県高山市）の幕府代官所に２月の震災で損地になった田地を報告したものである。この史料から稲越村では２月の震災で山崩れが起きていたことがわかる。

以上の史料２～４により、元田村・中沢上村・丸山村・稲越村の４ヵ村（第１図）は山崩れの被害にあっていたことがわかる。さらに、山崩れにより稲越村は11人、元田村は56人の死亡者を出している。稲越村・元田村においては、死亡原因のすべてが山崩れにより家が押し潰されたことによることがわかる。第１表には稲越村の潰家３軒とあるが、この原因も山崩れによるものである。

さて、山崩れの被害にあっていた元田村・中沢上村・丸山村・稲越村の４ヵ



第１図　元田村・中沢上村・丸山村・稲越村関係図

(9)　『飛騨河合村誌　史料編　上巻』

村は第１表にはどのように現れるのであろうか。第１表のｈ．一軒当り平均死亡者数は、７丸山村は3.71人、16稲越村は0.17人、18中沢上村は1.17人、20元田村は1.40人とある。４ヵ村のうち16稲越村以外の３ヵ村は一軒当り平均死亡者数が１人を越える。また第１表のうち、ｈ．一軒当り平均死亡者数が１人を越えるのは７丸山村、18中沢上村、20元田村の３ヵ村だけである。したがって、一軒当り平均死亡者数が１人を越える村の被害原因は土砂災害によるものであると考えていいのではないか。

ではなぜ16稲越村だけが一軒当り平均死亡者数が１人を越えないのか。次にこの点を考えてみよう。

史料３には、「稲越之桂上村」の彦次郎・次郎助・治兵衛の３軒が山抜け（山崩れ）で押し潰され、11人死んだとある。すでに述べたように、第１表の16稲越村は皆潰３軒・死亡者11人とあり、史料３と一致する。稲越村の被害は稲越の「桂上村」の被害であって、稲越の他の地域では、山崩れで家屋が全壊し、死亡者が出るような被害はなかったということになる。

現在の稲越地域を第２図で示した。第２図をみると稲越地域（上稲越・下稲越）は桂上をはじめ多くの集落で成り立っている。文化元年（1804）５月の「吉城郡稲越村・大木村・芦谷村墨引絵図」[10]を見ると、多くの集落が点

第２図　　稲越地域の集落
ベースマップは2000分１岐阜県吉城郡河合村全図
（新日本地図制作、河合村役場、1992年）

⑽　岐阜大学地域資料・情報センター編集『岐阜大学教育学部郷土博物館収蔵村絵図』（岐阜大学教育学部郷土博物館収蔵史料目録別冊１）岐阜大学地域資料・情報センター、2009年

在して描かれていて、第２図の景観と大きな違いはない。稲越は第１表の村名にみえるようにひとつの村である。天明８年（1788）２月の「稲越村・大木村・芦谷村明細帳」[11]によると、稲越村は家数50軒、人数348人の村であった。明治６年（1873）編纂の『斐太後風土記』[12]には、家数64戸、人数410余人とある。『斐太後風土記』の家数、人数は第１表の18稲越村の家数、人数とほぼ同じである。そして、この『斐太後風土記』には稲越村の項に、「枝村　桂上」と記される。桂上は稲越村の枝村であって、稲越村の一集落である。

資料２、４でみたように、稲越村は山崩れの被害にあってはいたものの、被害を受けたのは枝村の桂上であった。稲越村は広大で、比率としてみたときに一軒当り平均死亡者数が１人以上とならなかったと思われる。

それに比較して、７丸山村は家数７軒、人数51人の小規模の村であり、土砂崩れによって57％の家が全壊したため、一軒当り平均死亡者数が3.71人と他の村よりも際立った数値となる。第１表で１軒当り平均死亡者数が１人を越える村の死亡原因は、史料２～４から山崩れによるものであるとわかったが、ほかの地域で１軒当り平均死亡者数が１人以上で、その原因を証明する史料がない場合でも、その死亡の原因は山崩れによるものと考えてよかろう。

3　高田地震と土砂災害

２では、1858年飛越地震における飛騨国地域の一軒当り平均死亡者数と土砂災害について検討した。では、１軒当り平均死亡者数が１人以上の場合の死亡の原因は山崩れによるものであるということは、他の地域でもいえるのであろうか。次に1751年越後高田地震の場合を検討してみよう。

1751年越後高田地震では、家数、潰家数、死亡者数がわかる「宝暦元年地震之節諸事亡所之品書上帳」[13]がある。第２表はその文書をもとに、越後高田藩吉尾組31ヵ村のうちの３人以上の死亡者を出した４ヵ村を表にしたものである。[14]

⑾　岐阜県歴史資料館所蔵飛騨郡代高山陣屋文書

⑿　富田礼彦『斐太後風土記』大日本地誌大系刊行会、1916年

⒀　本文書は、矢田俊文・上田浩介「一七五一年越後高田地震史料・越後頸城郡吉尾組（桑取谷）地震之節諸事亡所之品書上帳と越後国頸城郡高田領往還破損所絵図」『災害と資料』５号、2011年に掲載。

４ヵ村の家屋被害を皆潰・流失・山崩下・半潰に分けて記載している。[15]

吉尾組31ヵ村の多くは桑取谷に所在する村で、第２表をみると、高田藩吉尾組の３人以上の死者を出した村はすべて「流失」か「山崩下」によって家屋被害を受けている。「山崩下」とは、山崩れによって埋まった家屋被害のことであると思われる。有間川の「流失」被害は、地震によって出来た天然ダムが決壊し、それによって家が流された[16]被害を表しているものと思われる。有間川の「流失」被害の原因は土砂災害である。

よって、1751年越後高田地震による高田藩吉尾組の３名以上の死亡者を出した４ヵ村の被害の原因は土砂災害によるものであることがわかる。この４ヵ村のうち３ヵ村の１軒当り平均死亡者数は１人を越える。１人を越えない３横山村も0.88人であり、１人に近い数値である。以上のことから、1751年越後高田地震による高田藩吉尾組における１軒当り平均死亡者数１人以上の被害原因は

第２表　1751年越後高田地震吉尾組被害一覧（死亡者３人以上）

番号	村名	a、家数（軒）	b、潰家（軒）	c、流失（軒）	d、山崩下（軒）	e、半潰（軒）	f、死者（人）	g、家屋全壊率（%）	h、家屋全半壊率（%）	i、一軒当り平均死者数（人）	人数（人）
1	東吉尾	9	1	1	7	0	28	100	100	3.11	45
2	西吉尾	22	15	0	5	0	28	91	91	1.27	153
3	横山村	26	6	0	9	6	23	58	81	0.88	164
4	有間川	39	0	30	9	0	45	100	100	1.15	284

典拠）矢田・卜部2011、斎京家文書（農林水産省農林水産政策研究所所蔵）
注）ｇは、（b＋c＋d）/a（%）、ｈは、（b＋c＋d＋f）/a（%）、ｉは、g/a（人）。

---

⑭　第２表以外の吉尾組27ヵ村の死亡者数は０～２人である。

⑮　矢田俊文・卜部厚志「1751年越後高田地震による被害分布と震源域の再検討」『資料学研究』８号、2011年

⑯　矢田・卜部前掲「1751年越後高田地震による被害分布と震源域の再検討」、矢田・上田前掲「一七五一年越後高田地震史料・越後頸城郡吉尾組（桑取谷）地震之節諸事亡所之品書上帳と越後国頸城郡高田領往還破損所絵図」

土砂災害によるものであることがわかる。

先に、1858年飛越地震における飛騨国地域の１軒当り平均死亡者数が１人以上の場合の死亡の原因は土砂災害（山崩れ）によるものであることを明らかにしたが、１軒当り平均死亡者数が１人以上の場合の死亡の原因は土砂災害（山崩れ）によるものであることは、1751年越後高田地震による高田藩吉尾組地域でも確認できた。

第１表の飛騨国地域の多くは、震源断層の跡津川断層のすぐそばにある。1858年飛越地震における一軒当り平均死亡者数が多い村の死亡原因は土砂災害によるものである。1751年越後高田地震の場合も同様である。高田藩吉尾組地域の村は震源域に含まれる村とその付近にある。[17] 1751年越後高田地震においても一軒当り平均死亡者数が多い村の多くの死亡原因は土砂災害によるものである。

揺れ潰れによる家屋被害にともなう死亡者数よりも、土砂災害による死亡者数のほうが遥かに多いのである。

お　わ　り　に

本稿では、1858年飛越地震における一軒当り平均死亡者数から災害の原因を明らかにしようとした。明らかにした点は以下の２点である。

１．1858年飛越地震における飛騨国地域の１軒当り平均死亡者数が１人以上の場合の死亡の原因は土砂災害によるものである。

２．1751年越後高田地震による高田藩吉尾組における１軒当り平均死亡者数１人以上の被害原因は土砂災害によるものであり、1858年飛越地震における飛騨国地域も1751年越後高田地震による高田藩吉尾組地域も１軒当り平均死亡者数１人以上の被害原因は土砂災害によるものであることから、地震による１軒当り平均死亡者数１人以上の被害原因は土砂災害によるものであると考えることができる。

地震による１軒当り平均死亡者数１人以上の被害原因は土砂災害によるものであるとすることは間違いないことであると思われるが、今後さらに他の事例も検討することにより明確にして行きたい。

⒄　矢田・卜部前掲「1751年越後高田地震による被害分布と震源域の再検討」。

［附記］

岐阜県歴史資料館所蔵文書の調査にあたっては、片桐昭彦氏のご協力をいただいた。感謝いたします。

正誤表

資料学研究, 第 12 号, 2015 年 3 月

4 頁（第 1 表）

正　32　野谷村

誤　32　野首村